

「食卓と、それを囲む人が見える生産者」と 「畑や四季、それをつくるお百姓さんが見える消費者」 という関係をめざして



田んぼの生き物調査

消費者が田んぼの生き物に触れることで、農業の多面的機能を感じてもらい、農業と農村の応援者となってくれることを願っている。



間 司 (はざま つかさ)
プロフィール

1950 生まれ。百草園代表。
熊本県有機農業研究会理事長、
日本有機農業研究会幹事、熊
本県就農アドバイザー等歴任。

2017 年熊本県就農支援機関協議会副代表。

1982 年新規就農。有機農業で野菜類、米の生産(水
田・畑 230 a) と産卵養鶏を中心に産消提携による
営農を行っている。

共著『「提携」、「認証」、そしてさらなる地域連携
を求めて』『食と農の原点 有機農業から未来へ』
(日本有機農業研究会編・発行、2008 年 3 月) など。

TEL & FAX 096-273-1917

Mail info@hyakusouen.jp http://hyakusouen.jp/



就農して間もない頃の家族写真

今回、思いもかけず有機農業アドバイザーに推薦されました。有機農業
に関する経験、知見、技能などを助言、相談、指導するアドバイザーとい
うことなのですが、業務内容みたいな形で決まっているものも無さそう
なので、役目を自分なりに理解してやっていこうと思っています。

農業外から有機農業をめざして参入する人の手助けを

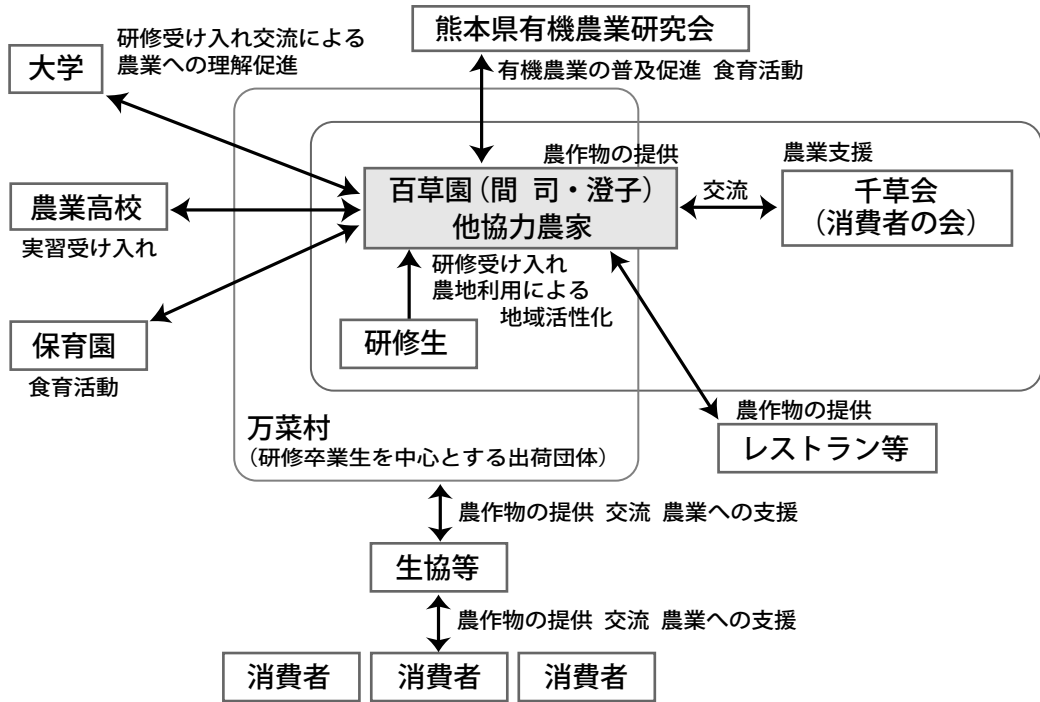
農業外から新規参入者として就農してから、まもなく35年が経とうとしています。私たち夫婦が就農した1980年代前半には、有機農業をとりまく世界はとても熱い雰囲気がありました。時代の勢いを得て、大きく広がっていくのではなく、一進一退で、なかなか拡がらないという現実があります。特に、慣行農法を営む農家の、有機への転換というのはあまり見ません。大きな政策的変換に伴う、国策としてのバックアップでもなければむずかしいのかな、という気もしています。

そんな中で、少数ではありますが、農業外から有機農業をめざして新規に参入してくる人の流れは、一貫してあります。ほかならぬ私たち夫婦自身がそうでしたので、そんな若者の力になれればと、常々思っていました。

有機農業アドバイザーとしてできることといえば、そうした若者たちの就農研修を受け入れ、地域で就農できるように農地を確保し、就農後も一人前の農家として自立できるまで、様々なサポートをしていくことです。

熊本県有機農業研究会は県からの認定を受けた「青年就農給付

百草園の活動の広がり



百草園の元研修生たちを中心とした出荷団体「万菜村」

少量多品目栽培というやり方

金」(現在は「農業次世代人材投資資金」と名称変更)の準備型研修機関として「熊本県有機農業者養成塾」という事業をやっています。すでに6期生まで40人くらいが研修を経て就農しています。百草園からも養成塾をふくめ、以前のインターン制度や、短期、長期の自主研修も含めると、20人以上巣立っていききました。

百草園自身は少量多品目栽培と自然卵養鶏を合わせた、有畜複合循環型の生産方法と産消提携の組み合わせで、ずっとやってきました。しかし近年は、新規就農者が提携だけで経営を確立するのは、むずかしい情勢があります。いかにして、彼らに経営的な安定を保証できる道を示すことができるのか、課題は、まだまだつきません。というより生産者仲間として、共に切り開いていくしかありません。

有機農家の経営といってもさまざまなパターンがありますが、少量多品目栽培は、有機農業の生産の在り方としてはとても有効だと考えています。

しかし、習熟するのに時間がかかるのと、安定量を求める一般流通にはなかなかなじみません。それぞれがミニ提携として個人的な出荷先をもつのは良いとして、ある程度グループとしてまと

まり、流通業者などに取り引きできる力が必要になります。

就農者が増えてきたこれまでの流れから、次は農業者としての定着と持続が問われてくるということで、経営の確立がキーワードになりそうです。